

生と死の絵本をめぐる (I)

尾上 明子
中根 淳子

I. 緒言

子どもの死の概念発達に関しては、これまで多くの研究がなされている。古典的研究と称される Gesell, A. や Nagy, M. H. らの研究に礎を置き、近年本邦でも多くの研究論文がある。本邦の1900年代後半の研究結果は、Nagy, M. H. らの死の概念形成、つまり、生の有限性、死の普遍性や絶対性を理解するのは9歳ごろであるという結論とあまり変わらないものであった。

1997年神戸連続児童殺傷事件、2001年附属池田小事件などの、児童が加害者、被害者となる事件の後、いのちを大切にすることの必要性が叫ばれ、同時に本邦での子どもの死生観の発達についての調査が盛んになってきた。

岡田らの調査では死の不可逆性は6～8歳で7割の子どもの死の不可逆性、普遍性ではおよそ半数の子どものみが理解し、9～11歳で7割の子どもの理解が進むと述べている¹⁾。

相良 - ローゼマイヤーの調査は、死の意味を形式的な概念要素に限定する理論的根拠がないことを主張し、子どもに自由に生と死のイメージを語ってもらい解釈する手法を用いている²⁾。相良は子どもたちが案外率直にそして中には深く生と死を考えている子どもがいると主張し、子どもから死を遠ざけることが無益であると述べている。

兵庫・生と死を考える会「生と死の教育」研究会の調査では、生命の有限性の認識、死の絶対性の認識はおおよそ7歳以降であると結論付けている³⁾。

辻本らは3つの死の概念、不動性、不可逆性、普遍性について調査している⁴⁾。不動性、普遍性は年齢により有意な差があり、それぞれ5歳児以降、6歳児以降に一定の理解を示すという結果であった。不可逆性は年齢による有意差はなく、4～6歳どの年齢でも一定の理解を示した。

つまり、概念要素を限定することに関して異論

はあるものの、子どもは幼児期を通して「死」を生活の中で感じ、その不可逆性や不可逆性、普遍性を理解し、やがて自分自身の死生観を確立していくのである。

しかし、子どもの死の概念の発達には、6歳以下の死別体験も影響を与えないという調査や逆にそれをゆがめるというものもある⁵⁾。両親の教育的、宗教的背景も概念発達には影響せず、年齢のみが規定因として有意という研究もある。

これでは、幼児期にいのちを大切にすることの何らかの教育をしたほうがよいのではという発想が是か非か判然としない。しかし、相良 - ローゼマイヤーは死んだ人を怖がる9歳女子のケースは、祖父の死の直前の顔色とその直後に廊下に置き去りにされた恐怖とが重なってそれが生じたのではないかと分析する⁶⁾。この子どもは9歳であるが、もし、年齢だけが死の概念を成熟させるのであるなら、この子どもの恐怖は救えないことになってしまう。

もう一つの身近な事例を引用する。愛知県平成18年度いのちを大切にすることを育む教育推進事業に本学附属幼稚園では「親と子で見つめよう、いのちを！」をテーマに応募し採択された。筆者らはこの事業に協力し、保護者に生と死に関連した絵本の紹介を行った。附属園ではその翌年もこの取り組みを継続してこれらの絵本の読み聞かせを行った。そのころみの中で、祖母の死を体験した男児がいた5歳児クラスで『さよなら エルマおばあさん』を取り上げて読み聞かせをしたことがあった⁷⁾。その男児は家に帰ってから母親にその本を買ってほしいと頼んだそうだ。これは研究として行ったケースではないので客観性に乏しいが、この子どもは祖母の死を絵本によって再体験し、自分にとってその作業が重要なことであることを認識し、さらに、子ども自身の意識にはのぼっていないかもしれないが、「家族とともにこ

の絵本を読む」ことの重要性を感じていたことは否定できないだろう。

レギーネ・シントラーは病床の子ども達の事例から、子どもの心の支えになるものは、どのような対話を大人としてきたのか、どのようなやり方—たとえば絵本を読む、お話を聞く—で蓄えができていたかに依存していると述べている⁸⁾。そして絵や、物語は主人公の不安について語ったり描いたりしていることで、それが無意識のうちに形を変え自分自身の不安を語る手だてとなっていると述べている。

また、近年の幼児の死の概念発達に研究には、絵本が用いられていることがある。たとえば、辻本らの研究では4～6歳の幼児に『おばあちゃんがいるといいのにな』という絵本（厳密に言うと絵本を基に作った紙芝居）の読み聞かせの後に内容に沿った質問をする研究方法を取っている⁹⁾¹⁰⁾。辻本らは研究方法の中では絵本を「幼児が死をイメージしやすいもの」と述べている¹¹⁾。また、『おばあちゃん』が病気でなくなるという内容としている。絵本そのものはおばあちゃんなくなるという内容ではなく、むしろ、おばあさんの無私な愛、孫を大きく包んでいた愛、おばあちゃんへの孫の深い愛と信頼、尊敬が描かれている。『わすれられないおくりもの』を使用している研究もある¹²⁾。つまり、逆にいうと、絵本は子どもから言葉を引き出せる、思いを言葉に代えることができるから使用するのであり、子どもの心に絵本は何らかの蓄えを築いたことを研究そのものが証明している。

願わくは、神戸や佐世保の殺傷事件のような悲しみを繰り返さないためにも、子どもたちのところに「いのちはかけがえないものである」という感覚を蓄えることはできないだろうか。我々はシントラーや相良・ローゼマイヤーが言うように、子どもから死を遠ざけるのではなく、率直に死を普通の保育を通じて教えていく必要性を感じている。その一つの手段となるのが絵本であると感じている。

II. いのちの絵本

我々の先行研究で、子どもに生と死をどのように伝えるか、という課題を持ったとき、レギーネ・

シントラーより次のような視点を持つに至った。まず、①「生と死」は、おとなから子どもに教える事柄ではなく、最終的には合理的に考えたり説明し尽くすことの出来ない神秘的な出来事であること。子どもにとっては、死に直面したときのおとなの言動（振る舞い）や社会的に媒介されるものに大きな影響を受けること。②毎日の生活のなかで、小さな死（時間性的問題、別離の体験など）を日頃から体験していることへの認識が大切。③死が避けられない以上、おとなも子どもも蓄えが必要。幼児にとっては、様々な文化材のなかでも特に絵本などから大いなる示唆を得ることができることなどを学んできた。

また、保育者となる者にとっては、我々の研究において、学生たちの実践を通して再確認したことは、自然な流れのなかで意識的に生と死を取り上げることであった¹³⁾。なぜならば本来、保育の中で生と死に出合う多くの機会が求められているはずであるが、様々な制約（園や周囲の自然環境の減少、時間、保育方法など）のなかで限定された経験を余儀なくされている現状があるからである。今ここで、その問題点を論ずるスペースはないが、保育者自身の意識がそこに無ければ、日頃の保育に流されてしまうのである。日常のなかで意識を持つことによって、子どもが発しているたくさんのいのちあふれる発言を聞き逃さず、子どもとともにいのちを見つめる保育を展開することができると思える。

さて、生と死の絵本は、近年様々な角度から注目され、多様な本が出版されるようになった。これらの傾向は、いろいろな原因があると思われるが、一言で表すならば「いのち」への危機感ではないだろうか。多くの人々が何かしらの言い知れぬ不安を抱えている時代であると言ってもよいと思われるのである。地球環境の悪化に伴う温暖化の問題は、今や危機的な問題として取り上げられるようになり小さないのちはもちろん人間生活をも脅かすようになってきている。そのような状況は、絶滅危惧生物が増え続けていることにも現れている。また、世界に目を向けると武力による闘争は後を絶たず、それに伴う難民、食料問題、貧困などがあり、平均寿命が極端に低い国々も多い。豊かで世界一の平均寿命となった我が国であるが、

一方、生活困窮者が増え生命存続の危機を抱えている現状がある。これらの問題も含めて、子どもであっても、広く視野を世界に向けることは重要な課題であると考えます。そこで、今回我々は、先

の研究を見直し、絵本のカテゴリー範囲を増やし、なるべくいのちにかかわる全ての分野を網羅できるようにした¹⁴⁾。

表 1 いのち (生と死) の絵本・カテゴリー

	カテゴリー	ポイント	絵本例
①	誕生・愛・信頼への認識	乳幼児期は、基本的信頼感の獲得が最も重要な課題である。受容されていることの実感や愛されている喜びを感じ、安心できる場が必要である。そのことを子どもが再認識するための援助となるもの。	「ママだいすき」「あやちゃんのうまれた日」「わたしのあかちゃん」「おかあさんがおかあさんになった日」「いつまでもすきでいてくれる?」「いいこって どんなこ?」「いのちはみえるよ」「ぼくがあかちゃんだったとき」「たいせつな きみ」他
②	自然界の生成と消滅	宇宙を含めた自然界の営み全てが関連していることは認められている。乳幼児であっても、命を持つ自然界の様々な生物や植物など命あるものへ関心を持ち、命の生成や消滅を知り、限りある命や命の循環などに気づくことは大切である。	「のにつき～野日記～」「さよならトンボ」「おおきな木のおくりもの」「葉っぱのフレディ」「つちらんど」「死を食べる」「ちいさなき」「こいぬのうんち」他
③	老化・死	乳幼児が生の一部に老化があり、その延長上に死があること、力の減退や外見の変化、病気などを知ることは大切である。これらは、子どもがどのように生きるか、共に生きる者として何をすべきかなど生き方のヒントや視野を拡げてくれるものである。	「おさこちゃんのだいすきなおばあちゃん」「わすれられないおくりもの」「ずーっと ずーっと だいすきだよ」「さよなら エルマおばあさん」「だいじょうぶだよ ゾウさん」「ぶたばあちゃん」他
④	親しい者との死による離別 (親族や友人、ペットの死)	誰にでも訪れる死は、乳幼児であっても免れることができない。祖父母や兄弟、友人、時に父母、動物などの死によって、生の有限性を知り、その別離は悲しいということを知ることは大切である。そこから愛する者との時間を大切にすることに気づく。	「どこにいるのおじいちゃん」「ベッレと二枚のてぶくろ」「レアの星」「ちいさなとりよ」他
⑤	自分自身の死	病気などで死に直面する子ども、成人するまで生きることの出来ない子どもがいる。自分自身の死に直面している子どもへの援助となるもの、また、身近にいるそのような子どもの存在を通して命や生きることのかけがえのなさに気づく。	「ダギーへの手紙」「真昼の星」「ぼくのいのち」他
⑥	繋がる命、人のいのち	「おかあさんのおかあさんは? そのおかあさんは? どんな人?」多くのおとなが子どもから受ける質問。命が繋がっている不思議とひとつの命のかけがえのなさに気づく。	「いのちのまつり」「おじいちゃんのおじいちゃんのおじいちゃんのおじいちゃん」他
⑦	死の向こうにあるいのち・希望。(キリスト教における永遠の命への希望)	死は悲しみばかりではなく、死を通して永遠の命への希望があること、信仰を持って現在を生きることによって、死が死で終わらないことを知る。また、幼児であっても目に見えない希望を信じていることができる。	「ベッレと二枚のてぶくろ」「ダギーへの手紙」「真昼の星」「マッチ売りの少女」「マローンおばあさん」他
⑧	生命 (人間、動物、植物) の不思議、食に関するもの、消化・排泄など	乳幼児は、自分の体や父母の身体の違い、いのちの不思議に様々な疑問を持つ。感性が研ぎ澄まされた子どもたちは、「なぜ?」と質問することによって、命の神秘や不思議に目覚め、科学する心が育つ。	「せいめいのれきし」「地球のうえで～いのちのたびのおはなし～」「みんなうんち」「からだのなかで ドウン ドウン」「かぐかく」他
⑨	地球環境、戦争、共生	地球環境における命という広い視野から考えるもの。乳幼児であっても、地球や世界、多くの民族、弱者とされている人々へ目を向けることができ	「エリカ 奇跡のいのち」「ぼくのだいいなあおいふね」「こんやくせんせい」「じゃがいもかあさん」「かみ

		る。特に年長になると自分以外の他者への眼差しを持つことは、重要である。	さまのおつくりになったせかい」他
⑩	民話、昔話、創作物語における生と死	民話や昔話は、いのちに関する話や生きる智恵など示唆に富むものが多い。また、長く読み継がれてきた物語、最近の創作物語からもいのちを学ぶことができる。	「スーホの白い馬」「寿命」「ねずの木の話」「ホレおばさん」「100万回生きたねこ」「マッチ売りの少女」他
⑪	生と死の教育(テキスト)	子どもに生と死を正面から一緒に考えたり、教えるように意図されて作成されたもの。	「さよならって いわせて」「死って、なに?」「いきてるって どんなこと?」「黒グルミのからのなかに」他

Ⅲ カテゴリーの解説（①～④）

① 誕生・愛・信頼への認識

いのち、生と死、生命などの多くの絵本のなかでも、誕生、親の子への愛情を主要なテーマとしているものが多い。これらの絵本により子どもは何を学びとるのだろうか。『あやちゃんのうまれたひ』も『ぼくがあかちゃんだったとき』も幼児期の子どもが、自分が覚えていない赤ちゃんだったころにさかのぼることによって、待ち望まれて、愛情深く育まれたことを再確認することができる¹⁵⁾¹⁶⁾。あくまでも個人的な体験だが、4歳になったばかりの初対面の卒業生の子どもを膝に抱いて『ぼくがあかちゃんだったとき』を読んだことがあった。この男児には2歳の弟がいて、弟の誕生や世話などを記憶している。この男児は物語の中の赤ちゃんを自分に置き換えたり、弟に置き換えたりしながら聞いた。途中おしっこが出たいらしくもじもじしていたが尋ねても大丈夫と言いつ張り、最後まで絵本から視線を外さなかった。

エリクソンは乳児期に基本的信頼を得ることの重要性を述べているが、その後に行われたさまざまな研究からも同様の結論が導かれたものが多い¹⁷⁾。乳児は視線の交錯、保護者の言葉かけ、体に触れるタイミングなどによって調和のある相互的な行動を覚え、自分の感情を調整する方法を学ぶと言われる¹⁸⁾。つまり、深い愛情に裏付けられた世話によって子どもは信頼感や他者への愛情を育むのである。

4歳になったばかりの子どもが見知らぬ女性の膝のなかで食い入るように絵本を見たことはどのような意味があったのだろうか。誕生の物語の再現により、自分も主人公と同様に待ち望まれて生まれ、愛されていることを感じるにより自律の時期におかれた幼児にとって生きていく上での

希望につながると推測される。

一方、親のゆるぎない愛を直接的に表した絵本が『いいこってどんなこ?』である¹⁹⁾。子どもと接しているとき大人は「いい子にしていたら〇〇をあげるよ」「泣くんじゃありません」「もうちょっと、鼻が高ければね」「うちの子、ほんとにバカで」など、無神経に言葉を発する。それはその時のコンテキストにおいて発しているものであり、ほとんどの場合そう思っていないのだが、子どもにとっては重大な問題である。通常は日々の生活のなかでそれらは打ち消され自信を取り戻していくのであるが、時には、大泣きしても、いたずらでも、怒りんぼでもこわがりでもおかあさんにとって自分がそのままでかけがえのない存在であることを絵本を通して確認することも必要かもしれない。

この本は1992年に日本で出版された。作者はジーン・モデシットでアメリカの作家である。表紙の次に「わたしたちみんなに」という前文がある。アメリカではすでに1963年、カリフォルニア州で児童虐待通報法が成立しているので児童虐待は当時すでに深刻であったと思われる。この絵本は、先に述べたような子ども自身の確認作業よりもむしろ、保護者に対する作者の悲痛な叫びであるのかもしれない。いずれにしても日本で児童虐待の相談件数が目立って多くなったのが1990年ごろからであるので、この本の出版はタイムリーであった。親と子が絵本を読みながら、共にかけがえのないいのちをあらためて感じることができる。

② 自然界の生成と消滅

R・シントラーは、「子どもはすでに早い時期から、たとえば一年の循環や自然の中の生成と消滅について気づいている」と述べている²⁰⁾。これは、

必ずしも子どもが口で表現したり、真に理解しているということではなく、「どこかで気づいている」と解してよいだろう。死生観の発達研究では、特に幼児期の植物の生については、幼児期の前半は理解が困難であった。しかし、シントラーの言う気づきは、子どもの直感的な気づきであり、ペスタロッチャーやフレールも子どもの直感力について、その正しさや重要性を述べている。死の準備教育では、子どものこのような気づきは、おとなの援助によって更に認識へと導かれることが重要である。

ここでは、まず『のにつき～野日記～』を取り上げる²¹⁾。これは、作者の代表作である。イタチの親が死に、側にいる子どもが泣いているところから始まる絵本である。絵本は子どもだけのためのものであるという認識は今日無くなってきたとはいえ、死の場面から始まる絵本は数少ない。作者は、体が朽ちていく過程を絵によって表現しているが、時間を追うごとに小さな虫や鳥が集まってくる様子が楽しく描かれている。これらの生き物たちが、ご馳走を前にまるでお祭り騒ぎのように喜んで吹き出しの言葉によって書き込まれている。秋に死んだイタチは、冬になるころには形が崩れ、やがて土に帰っていく。そこには、もうイタチの姿はない。やがて春になるとそこから草花の芽が出、蛇やカエル、鳥や虫たちが春を謳歌している様子が生き生きと描かれている。最後にさりげなくあのイタチの子どもが家族を連れて登場する。

近藤氏は、この絵本を描くために実際に狸の死骸を手に入れ、お子さんとともに観察しながら製作したという。それだけに、作者の熱意と感動が伝わってくる力作である。死を通して、いのちの繋がりと循環を教えてくれる絵本として、子どもの心を捉えるものであると考える。

『さよならトンボ』は、石亀泰郎氏の写真絵本である²²⁾。秋の美しい自然を背景にトンボの生態が浮き彫りにされている。晩秋になるとクモに捕まったり、植物にひっかかったり様々な障害のなかでトンボは死んでしまう。また、霜のなかで寒さに凍りついたトンボの羽が自然界の厳しさを伝える。しかし、これらも自然の営みであることを思い知らされる。最後は、春になり新しいいのち

予感させて締めくくられている。この両者の絵本は、決して「教える」のではなく、見て感じることの大切さが伝わってくるものであり、幼児期の子どもたちへの適切な教材となるものだろう。

宮崎学氏の『動物の目で環境を見る2～死を食べる』は、同じ写真絵本でも『さよならトンボ』とは、全く趣きが違い非常にリアルな写真で構成されている²³⁾。さっきまで野山を駆け巡っていたきつね、カエルや魚などが死ぬと、そこに、たちまちいろいろな生き物が集まってくるのであるが、その経過が記録されているのである。たとえば、きつねの死骸が腐ってくるとハエの幼虫であるうじは、その栄養を食べて成長する。体がぼろぼろになるころ、ハクビシンがやって来てうじを食べる。冬になると僅かな皮と骨が残されるが、それもやがてバクテリアが分解してしまう。時間を追った記録であり、自然界のいのちが見事に繋がっている様子が分かる。作者は、私たち地球に生きる全ての生き物は、「みんな、死を食べている」というメッセージを伝えており、おとなには一見目を背けたくくなるような光景かもしれないが、子どもはどうであろうか²⁴⁾？筆者は、子どもはありのままの現実を素直に受け容れるのではないかと考える。作者は最後に「死は食べられることで、ほかの生きものの、いのちにかわっているんだ。もしかしたら、死ぬことも、死を食べることも、いのちとおなじくらい、たいせつなことなんじゃないだろうか。だから、ぼくは、いっしょうけんめい死を食べて、いっしょうけんめい生きたいと思う。きみは、どう思うだろうか。」と締めくくる²⁵⁾。死をタブー視するのではなく、いのちの循環という視点を正面から取り上げた他に類を見ない作品である。幼児期にある子どもは、目に見えない存在を信じることができ、特に3歳頃からはファンタジーと現実を往来しつつ遊ぶことを得意とする時期に入る。子どもは、素直にこのリアルな現実の絵本の世界にも入ることができるのではないだろうか。

『こいぬのうんち』は、韓国で誕生した大変ユニークで心に訴える作品である²⁶⁾。この絵本も物語の進行とともにいつのまにか自然のしくみや、いのちの循環を感じさせるもので3歳から十分に使用できる絵本である。汚く臭い嫌われものう

んちであるが、自然界に無駄がないこと、何かの役にたっているということ、最後にタンポポを抱きしめるところは、同一視できる子どもたちの心に届くであろう。

③ 老化・死

子どもの世界と老化や死は無縁のものとする考えの傾向があるが、絵本における老人と子どものテーマは実に多い。必ずしも死と結びつかないものを含めるとその範囲は広く、この意味は深い。

レギーネ・シントラーは、『希望へと育む』の中で、老人と子どもと一緒に生きること、それは、必ずしも一緒に生活することを意味するのではないが、このことは、両者にとって豊かな実りをもたらし、子どもにとっては、人生の視野を大きく広げてくれるものであると述べている²⁷⁾。それは、子どもが老人と交わることによって、力の減退や老化が生の実質的な一部であること、そして、老人は、長い人生を送ってきた先達としての貴重なパートナーであることを知ることの重要性を指摘している。

『わすれられないおくりもの』は、1986年、スーザン・バーレイがはじめて子どものための本として出版した絵本であるが、死に向き合う絵本としては、先駆的な存在である²⁸⁾。同年、アルフォンス・デーケンが、この年を日本における死のタブー化から「死への準備教育」（デス・エデュケーション）のターニングポイントとして位置づけているのと一致しているのは偶然のことであろうが、時代の変化を感じるものである²⁹⁾。物語は、最初に年老いたアナグマが登場し、自分が死に近いくことを悟るところから始まり、ある日「長いトンネルのむこうに行くよ」という手紙を残して死んでしまう。アナグマを愛している動物たちは冬の間悲しむが春になり行き来できるようになると、それぞれがアナグマから教えられたことを話し合う。そして、アナグマが残してくれたものの大きさに皆が感謝するという内容である。誰にとっても、未経験なことを理解することは難しく、なおさら、子どもにとって未知である老化を理解することは非常に難しいと思われる。しかし、この絵本は、体はいつかその機能が弱り、限

界が来ることを静かに穏やかに伝えている。また、残された動物たちがアナグマから受けた恩恵は、シントラーが言うように、老人とともに生きることからの実りの豊かさを感じさせる優れた絵本であると考えられる。

ディック・ブルーナは、1996年『ミッフィーのおばあちゃん』を世に出したが、この作品は、子どもと死のテーマを扱ったことによって世界中に大きな波紋を投げかけたようである³⁰⁾。ブルーナは、その理由として、「かならずいつかは体験しなければならぬ出来事のひとつだから。学校や動物園に行くことと同じように、死を経験することも人生の大事な一部」と述べている³¹⁾。ブルーナという世界的に著名な作家が、生の一部として、また、生の先にある死をテーマにした意味は大きい。最初のページは、ミッフィーのおばあちゃんが死に、ミッフィーが大粒の涙を流して泣いているところから始まる。ブルーナが製作哲学とするいくつかの要素のひとつとして、「ほとんどの登場人物が正面を向いている」のは、「いつも読者と対話していきたい」というところから来るものであるが、最初のページに主人公であるミッフィーが大粒の涙を流してこちらを向いていることから、読者に死を正面から見つめて欲しいという強い意図が感じられる³²⁾。そして、死は悲しいものであり、おじいちゃんもおとうさんもおかあさんも、おばさんたちも悲しいのだということを皆が涙を流すという表現で見事に伝えようとしている。2008年、松岡享子により訳された『うさこちゃんのだいすきなおばあちゃん』は、絵は同じであるが、この点がより明確に強調されて訳されていることに注目したい³³⁾。

『ぶたばあちゃん』は、ぶたの祖母と孫の物語である³⁴⁾。この作品は、祖母が自分の死を予感し準備する様子を隠さず孫に見せながら、残された時間を大切にしつつ、最後の別れまでを悔いのないように心を尽くして過ごすというものである。先の「わすれられないおくりもの」のアナグマが死を予見したり体の老化を感じたりするのは同様であるが、この絵本は、「死の準備」という視点が描かれているのが特徴的である。子どもには十分な理解はしがたいと思われるが、雰囲気のみならず何か厳粛なものを感じるに違いない。むしろおと

なに対して、大きな示唆を与えてくれるものではないだろうか。また、緒言で紹介した『さよなら

エルマおばあさん』は、フォトジャーナリストである大塚 敦子氏と主人公であるエルマとの出会いによって誕生したものであるが、エルマから「13人目の孫」と呼ばれるほどの信頼関係があったからこそ、死にゆくまでの全てを写真記録するという作品が生まれたのである³⁵⁾。エルマは、「多発性骨髄腫」という病気になったが、「わたしの命は、あと一年くらいだろうから、いろいろ準備をはじめないとね」と言って、家族の歴史を書き始める³⁶⁾。「また、最後まで楽しみながら生きたいね」と在宅治療を続け、なるべくいつも通りの生活をしながら、娘や孫、兄弟や友人とのお別れをする³⁷⁾。まさに「死の準備」をしていくのである。緒言の事例のように幼児であっても、身近な人が死ぬという経験をした場合、おとなの蓄えによるこのような絵本の提供が重要な意味となる場合がある。

④ 親しいものとの死による離別（親族や友人、ペットの死）

多くの子どもたちは思春期までに身近な人の死を体験する。父母、祖父母、時には友人を亡くした経験を持つ場合もある。しかし、幼い子どもの場合はどうだろう。ほとんどの子どもは死とは無縁であると思っている保育者も多いだろう。しかし、保護者を病気や事故で亡くす子ども、あるいは仲良しだった友達をなくす子どももいる。『レアの星』は仲良しの友だちを白血病で失う物語である³⁸⁾。『ペツレと二枚のてぶくろ』は妹を突然死で失った少年の物語である³⁹⁾。同じテーマを持つ絵本に、細谷亮太の『おにいちゃんがいてよかった』もある⁴⁰⁾。

幼い子どもが友だちを亡くすという普段の生活からかけ離れた事態に保育者や保護者が直面すると、うろたえ、子どもをそこから遠ざけようとしてしまうのではないだろうか。ロビンは小児がんの友だちレアを見舞い「びょうきがなおるんだったら、ぼくのおもちゃをぜんぶ、レアにあげてもいい」と思う。この心の動きはたとえ幼くとも非常に気高く読者の心を揺さぶる。レアの「もう、わたし、元気になれないのかなあ。」という言葉に

対し「ロビンは、なにもいえず、レアの手をにぎりしめました」という描写がある。大人だったら何かを言わなければと思って口に出しても、それが魔法のように相手を慰める言葉にはなりえない。しかし、レアはその瞬間に温かい慰めと支えを感じ、ロビンにはレアの手のぬくもりや、その時ともにいた幸福感が思い出として残る。

この本は喪失を扱った手引書ではなく、絵本である。この本を読んでもらった子どもは友だちを失うことの深い悲しみと、しかしロビンの清廉な愛情によってなにかあたたかいものを感じるかもしれない。それが将来その子どもの死生観を形作るための一つの蓄えとなるのではないだろうか。

『ペツレと二枚のてぶくろ』はキリスト教に基づく死の概念が展開されている⁴¹⁾。幼児が読むのは少し長く難解であり、小学生以上であれば絵本として楽しめると思われる。

この絵本には妹の死の原因を「自分の責任」としてとらえがちな子どもの心の動きを描写している。『レアの星』にも同様の描写がある⁴²⁾。私たちが実施している「いのちの教育」のグループワークにおいて、祖父母やペットの死に関連した罪悪感を長く持っている学生がいることがわかる。

「病気で変化した様子が怖くしてお見舞いに行けなかった」「ペットが死んだ時に学校に行っていて立ち会えなかった」などであるが、長いこと罪悪感が消えずに苦しんでいる。家族にすらその感情を告げていないこともある。

これらの絵本もまた解説書や手引書ではないが、子どもが自分の体験に重ね、罪悪感を解消する手助けとなったり、将来、いのちの永遠性について考えるときの蓄えとなるのではないだろうか。

ペットの死を扱った絵本も多い。『ずーっとずっとだいすきだよ』は代表的な絵本であり『きみにあえてよかった』も同じテーマを扱っている⁴³⁾⁴⁴⁾。この二つの絵本には、家族同様に大切にしているペットにもいつか死がやってくること、愛情を持って日々関わることの重要性が描かれている。また、家族としてのペットの死は子どもだけでなくおとなでも喪失の苦しみを体験する。これらの本が、家族で死んだペットの思い出話をしたり、現在飼っているペットのいのちについて語

るきっかけとなれば、それによって少しずつ悲しみが癒されることもあろう。

Ⅳ おわりに

我々は、保育者養成におけるいのちの教育の研究を継続してきたが、その過程で保育者として立つ者が子どもの死生観の発達を知るとともに意図的にいのちの教育を行なうことの重要性を認識するに至った。また、指導案作成を指導し現場での実践を試みる際、身近な絵本を使用することの有効性も考察してきた。今回の研究は、教材としての絵本についての考察である。近年、多くの生と死に関する絵本が出版されるようになったが、先の研究では、より直接的に生と死を扱ったものに限って扱ってきた。本論でも基本的にはこれを原則としているが、より「いのち」という広い視野でみつめなおし、子どもの死生観を念頭に置きながら、子どもに与えたい絵本のカテゴリーを広範にし次のように11とした。①誕生・愛・信頼への認識 ②自然界の生成と消滅 ③老化・死 ④親子との死による離別（親族や友人、ペットの死）⑤自分自身の死 ⑥繋がるいのち、人のいのち ⑦死の向こうにあるいのち・希望 ⑧いのち（人間、動物、植物など）の不思議 ⑨地球環境、戦争、共生 ⑩民話、昔話、創作物語における生と死 ⑪生と死の教育（テキスト）。今回は、①～④までの考察である。

その結果、①については、親と子の絆の重要性をあらためて認識し、絵本を通して親子や保育者が確認することの重要性。②については、自然の営みについて知ることは、直接的な体験を通して得ることの方が大きいのは当然であるが、様々な限界性がある環境のなかで、今日、いのちを意識した写真絵本などは非常に有効であること、また、このようないのちの循環を意図的にとりあげた絵本は、教えるのではなく、感じさせるものとしてとりあげていくことの重要性を述べた。③については、これまで子どもと老人とのかかわりの物語は普遍的に存在してきたが、特に老化や死をとりあげた絵本も出版されるようになったこと、老人とのかかわりを通して老化や死を体験する子どもにとっても、人生を豊かにするこのような絵本は意味深いものであることを確認した。④は、幼い

子どもであっても身近な人（親・兄弟姉妹・友人・ペットなど）の死を体験することがあるが、そのようなとき、うろたえるのではなく親や保育者が蓄えとして、絵本のなかに含まれるメッセージ（いのちの永遠性など）を子どもに与えていくと有効であると思われた。

今回は、以上であるが今後、引き続き⑤～⑪についても考察していきたい。

引用文献 ・ 註

- 1) 岡田洋子「子どもの死の概念」『小児看護』11号、1998年、1445-1452頁。
- 2) 相良-ローゼマイヤー-みはる「子どもの死の感じ方」『小児看護』30号、2007年、797-1809頁。
- 3) 兵庫・生と死を考える会「生と死の教育」研究会『幼児・児童の死生観についての発達段階に関する調査』兵庫生と死を考える会、2003年。
- 4) 辻本耐、中谷素之「幼児期における死の概念の発達の变化」『日本教育心理学会第50回総会発表論文集』2008年、704頁。
- 5) 中村照子「子どもの死の概念」『発達心理学研究』第5巻、第1号、1994年、61-71頁。
- 6) 前掲2)、1801-1803頁。
- 7) 大塚敦子（写真・文）『さよなら エルマおばあさん』小学館、2000年。
- 8) 茂純子他「レギーネ・シントラーの『希望へと育む』～要約と解説～」2006年、47頁。
- 9) 前掲4) 同頁。
- 10) 松田素子作、石倉欣二絵『おばあちゃんがいるといいのにな』ポプラ社、1994年
- 11) 前掲4) 同頁。
- 12) スーザン・バーレイ作・絵『わすれられないおくりもの』小川仁央訳、評論社、1986年。
- 13) 中根淳子・尾上明子「保育におけるいのちの教育-学生による指導案作り-」『名古屋柳城短期大学紀要』29号、2007年、150頁
- 14) 尾上明子・中根淳子・村田康常「保育者養成における生と死の授業」『名古屋柳城短期大学紀要』28号、2006年、65頁
- 15) 浜田桂子作・絵『あやちゃんのうまれたひ』福音館書店1984年。

- 16) 浜田 桂子作・絵『ぼくがあかちゃんだったとき』教育画劇、200年。
- 17) E.H. エリクソン『ライフサイクル、その完結』村瀬孝雄・近藤邦夫訳、みすず書房、1989年、71-78頁。
- 18) Robin Karr-Morse, Meredith S. Wiley『育児室からの亡霊』毎日新聞社、朝野富三・庄司修也監訳、2000年137頁。
- 19) ジーン・モデシット作、ロビン・スポワート絵『いいこってどんなこ?』もきかずこ訳、富山房、1994年。
- 20) 前掲8) 茂純子他 46頁
- 21) 近藤 薫美子『のにつき〜野日記』アリス館、1998年
- 22) 石亀 泰朗『さよなら トンボ』文化出版局、2002年
- 23) 宮崎 学『動物の目で環境を見る 2 死を食べる』偕成社、2002年
- 24) 前掲23) 30頁
- 25) 前掲23) 34頁
- 26) クン・ジョンセン文 ジョンセン絵『こいぬのうんち』平凡社、2000年
- 27) 前掲8) 50頁
- 28) 前掲12)
- 29) アルフォンス・デーケン 「生と死の教育」岩波書店 5頁
 註：アルフォンス・デーケン：1932年ドイツ生まれ。哲学、死生学。上智大学名誉教授。上智大学で、死の哲学など30年以上講義してきた。わが国にはじめて「死生学」という新しい概念を定着させたという理由で第39回菊池寛賞受賞。「東京・生と死を考える会」「生と死を考える会全国協議会」名誉会長。
- 30) ディック・ブルーナ作『ミッフィーのおばあちゃん』講談社、2005年
- 31) 『ディック・ブルーナのすべて』講談社、1999年 70頁
- 32) 前掲31) 40頁
- 33) ディック・ブルーナ作『うさこちゃんのだいすきなおばあちゃん』福音館書店、2008年
- 34) マーガレット・ワイルド文 ロン・ブルックス絵『ぶたばあちゃん』あすなろ書房 1995年
- 35) 前掲7) 9頁
- 36) 前掲7) 12頁
- 37) 前掲7) 頁
- 38) パトリック・ジルソン作、クロード・K・デュボワ絵『レアの星』野坂悦子訳、くもん出版、2003
- 39) カーリ・ヴァインイエ文、ビビアン・ザール・オルセン絵『パッレと二枚のてぶくろ』イングリッド・アスケ、児玉千晶訳、イブック出版、2003年。
- 40) 細谷亮太作、永井泰子絵『おにいちゃんがいてよかった』岩崎書店、2003年。
- 41) 前掲39)。
- 42) 前掲38)。
- 43) ハンス・ウィルヘルム作・絵『ずーっとずっとだいすきだよ』久山 太市訳、評論社、1988年。
- 44) エリザベス・デール作、フレデリック・ジュース絵『きみにあえてよかった』小川 仁央訳、評論社、1997年。

“Life and Death” in the Picture Books

Onoe, Akiko*

Nakane, Junko*

死と無縁であるかのように感じる幼児期において、実は子どもは死生観を育んでいる。わが国の子どもは、死の絶対性や普遍性を7歳ごろにほぼ確立するといわれる。したがって幼児期に「いのちの教育」を意図的に実施し、死生観の発達を支援することが重要である。

そのための一つの重要な教材として絵本がある。絵本を用いるねらいは、子どもに生や死について正しい知識を教え込むのではなく、いのちのかけがえのなさ、いのちのつながり、他の動植物により支えられるいのちを感じ取り、死生観を育むための蓄えとすることである。今回、「いのち」を主要テーマにした絵本を11のカテゴリーに分類し、①誕生・愛・信頼への認識 ②自然界の生成と消滅 ③老化・死 ④親しい者との死による離別（親族や友人、ペットの死）の4つのカテゴリーについて絵本のねらいやいのちの教育における使い方について解説した。

キーワード：子ども，死生観，いのちの教育，絵本